

戦争と天皇制

発行のこころ 3

東京大学50周年東京フォーラム

いき、佐藤、陳 東大：吉川、西村、後藤、犬丸

早大：池山 中大：岡本 早大：中島、土本、高橋、吉田

京大：小畑、青木、山本（玉井）、酒井、信太 5

第1期全学連高揚の瞬間 高橋彦博 38

わが「戦争と天皇制」 長瀬隆 47

早稲田大學・1950年・記録の会

発行のことは

私たち、1950年10月、早稲田大学にあってレッドパージに反対する闘争を闘ったものたちは、その終了後、早稲田50年会を結成し、結束を保持し、親睦を重ねてきた。また1986年には文集『松尾隆』、1988年には同じく『由井誓』を制作・刊行してきた。しかし90年代にはいり、仲間のうちに死没する人々があり、今のうちに当時の資料を保存し、証言を残しておくことが必要であると思うこととなった。かくて私たちは1998年12月より、季刊誌『早稲田・1950年・史料と証言』を刊行することとなった。それは2000年6月発行の第6号をもって完結した。

この雑誌の特徴は、ほぼ同じ目的をもって、同時期に併行して発行されていた他の大学の雑誌と比較すると明瞭になる。私たちは、戦後学生運動の最初の大きな山であった1950年を中心としながら、その後の10数年をカバーした。すなわち戦争末期の卒業生に始まり、戦後は1956年秋の砂川闘争あたりまでの執筆者を揃えたのである。

革新的あるいは民主的諸運動は、今日さまざまな流派に分かれており、その間に対立がないわけではない。しかしそれを努めて克服しつつ、幅広い結集を目指して編集しており、評価されてよいことであると考え。こうして私たちは、あの歴史的な1950年10月の大闘争の日より、数えてまさに50年目の2000年10月17日、母校早大の大隈会館においてその50周年を記念し、季刊雑誌の完結を祝する大きな集まりをもった。

しかしこれに類似する集まりは全国の諸大学でも行われていた。たとえば1950年5月の東北大におけるイールズ博士の来学に抗議する運動は、この年の全学連のレッドパージに反対する闘争の嚆矢となったものであるが、この50周年を記念する集まりが、同様に2000年5月、東京において同大出身者によってもたれた。その中心人物の1人であ

るいき一郎君は四高出身で、京大進学者に友人をもち、1951年11月12日の天皇の京大来学にさいして起こったいわゆる「天皇事件」の50周年の集まりが、京都でもたれたという情報を私たちにもたらした。さらに同君は、その前日である11月11日、東京において『京大天皇事件50周年東京フォーラム』を開催できないものかという相談を私たちにもちかけた。私たちは検討のうえそれが可能であると判断し、「いまあらためて戦争と天皇制を問う」の副題のもと、右フォーラムを開催した。

出席者は京大の14人——うち2名は関西から——を中心に、早24、東、東北各7、中央4、法、東教、東経、東洋、明学、横国、慶、阪大の各1名、さらに一般市民が加わった70人であった。時間は、途中10分の休憩を挟み、午後2時から5時近くまで及ぶものであった。

知られているように、『早稲田・1950年・史料と証言』と併行して、多大に共通する目的を追求した、東大出身者による『一九会文集』の刊行があり、誌面と懇親会において早・東の間には久しく密接な交流が存在する。しかし東西の諸大学の運動関係者がこれほど多数参加した集会は、過去に例がなく、奇蹟に近く、稔り豊かに終わっただけに、最初にして最後となるのではなからうかという思いを残した。

フォーラムでの全発言は150分のテープに収録されており、その総ては50年の重みをそなえており、出版に値すると確信される。私たちは、差し当たって、ここにその主要部を要約・短縮して紹介することにした。フォーラムの前記した副題は本小冊子においては、表題として使用されることとなった。

またこれの理解に資するべく、私たちの会に所属する高橋彦博と長瀬隆両人の2本の評論を掲げた。諸兄弟の忌憚のないご意見とご批評を願うものである。

2002年2月20日

早稲田大学 1950年 記録の会

「京大天皇事件50周年東京フォーラム」

2001年11月11日、文京シビックセンター

編集・解説 長瀬隆

はじめに

個々の発言には、内容を損なわぬよう留意しつつ、要約と短縮の手が加えられた。各位の現職と地位については記さないことにした。高名・非高名の相違があり、それを敢えてすれば、某氏が某企業の社長その他であるといったことをも記さなければならなくなる。いわんやここで問題にされている青春時代には全員が無名だったからである。ただし当時の運動における役職については、必要な場合にかぎり、発言のなかで示すか、〔〕括弧を付して編集者が示す処置を講じた。また、発言者が明示せず、また明示できなかった箇所では、フォーラム全体の流れと意義を明確化すべく、編集者が同様に〔〕括弧を付して注釈的解説を加えた箇所がある。また若干ではあるが、言葉を補わせてもらった箇所もある。以上の操作に関連して生じた誤謬があるとするならば、その責任はもちろん編集者に属するものである。

フォーラムに先だってプログラムが作成され、そこには関連資料が収められていた。そのうちの最も重要なひとつである京大同学会の天皇への公開質問状は、各発言の基礎となっていた。それゆえにそれここでは冒頭に置くことにした。原文は縦書きであるが、本小冊子に合わせて横書きに直し、また1、2の漢字を現代表記にあらためた。

続いて当日歌われた「平和を守れ」の歌詞と楽譜を掲げた。当時、学生間で広く歌われていた歌ではあるが、今日では知る人のほとんどない歌となっているからである。しかしこの歌なしに事件を理解することはできない。当時もその後も関東で愛唱されていた歌に「国際学連歌」があり、しかし京大で歌われたのが、それではなく、これであ

ったということは、興味深い問題を提示している。この歌は同学会の一連の文書には「平和の歌」の名で記載されている。その当時は「平和の歌」の名で流布し、1954年にメーデー歌として選ばれたときに「平和を守れ」と変更されたのかかもしれない。以後、諸歌集にはこの名で掲載されてきた。

公 開 質 問 状

この公開質問状は十日に同学会が学長を通じて天皇にお渡ししようとしたところ、学長が拒否されたものです。私達の天皇に対する気持を率直に述べたものとして市民の皆さんにも公表する次第です。

私達は一個の人間として貴方を見るとき、同情に耐えません。例えば貴方は本部の美しい廊下を歩きながら、その白い壁の裏側は法経教室のひびわれた壁であることを知ろうともされない。貴方の行路は数週間も前から、何時何分にどこ、それから何分后にはどこときつちりと定められていて、貴方は何らの自主性もなく、定まった時間に定まった場所を通らねばなりません。

貴方は一種の機械的人間であり、民衆支配のために自己の人間性を犠牲にした犠牲者であります。私たちはそのことを人間としての貴方のために気の毒に思います。

しかし貴方がかつて平和な宮殿の中にいて、その宮殿の外で多くの若者たちがわだつみの叫びをあげ、怨みをのんで死んでいることを知ろうともされなかったこと。又今と同じようにすじがきにしがたって歩き乍ら太平洋戦争のために、軍国主義の支柱となられたことを考えるとき、私達はもはや貴方に同情していることはできないのです。しかし貴方は今も変わっていません。名前だけは人間天皇であるけれどもそれがかつての神様天皇のデモクラシー版にすぎないことを私達は考えざるを得ず、貴方が今又単独講和と再軍備の日本でかつてと同じような戦争イデオロギーの一つの支柱としての役割を果たそうとしてい

ることを認めざるを得ないので。我々は勿論かつての貴方の責任を許しはしないけれどもそれよりも、なお一層貴方が同じあやまちを繰り返さないことを望みます。

そのために私達は貴方が退位され、天皇制が廃止されることを望むものです。貴方自身それを望まれぬとしても少なくとも一人の人間として憲法によって貴方に象徴されている人間達の叫びに耳をかたむけ、私たちの質問に人間として答えていただくことを希望するのです。

質 問

1、もし日本が戦争に巻き込まれそうな事態が起こるならばかつての終戦の詔勅において万世に平和の道を聞くことを宣言された貴方は個人としてでもそれを拒否するように世界に訴えられる用意があるでしょうか。

2、貴方は日本に再軍備が強要される様な事態が起こった時、憲法において武装放棄を宣言した日本国の天皇としてこれを拒否するよう呼びかける用意があるでしょうか。

3、貴方の行幸を理由として京都では多くの自由の制限が行われ、又準備のために貧しい市民に廻るべき数百万円が空費されています。

貴方は民衆のためにこれらの不自由と空費を希望されるのでしょうか。

4、貴方が京大に來られて最も必要なことは教授の進講ではなくて大學の研究の現状を知り、学生の勉強、生活の実態を知られることであると思いますが、その点について学生へ会って話し合ってくださいたいと思うのですが不可能でしょうか。

5、広島、長崎の原爆の悲惨は貴方も終戦の詔勅で強調されています。その事は私たちはまったく同意見で、それを世界に徹底させるために原爆展を制作しましたが、その開催が貴方の来学を理由として妨碍されています。貴方はそれを希望されるでしょうか

又私たちはとくに貴方にそれを見たいと思いますが見て
いただけるでしょうか。

私達はいまだ日本において貴方の持っている影響力が大であることを
認めます。それ故にこそ、貴方が民衆支配の道具として使われない
で、平和な世界のために、意見をもちた個人として、努力されること
に希望をつなぐものです。一国の象徴が民衆の幸福について、世界の
平和について何らの意見ももたない方であるとすれば、それは日本の
悲劇であるといわねばなりません。私達は貴方がこれらの質問によせ
られる回答に心から期待します。

昭和26年11月12日

天皇裕仁殿 京都大学同学会

平和を守れ

木谷健 作詞
種市蔵 作曲

歌 詞

- 1 解放のため 尊き命をとして 2 独立のため 北氷洋のあなた
はげしき心を燃やし アフリカアジアの中に
闘う友よ 世界の友よ 闘う友よ 世界の友よ
吹きつのる嵐をついて 屈辱の鎖を断ちて
固ききずな結びつつ たくまし腕を組み合せ
平和 平和 平和を守れ 平和 平和 平和を守れ

司会 司会を勤めさせていただいき (壺岐) 一郎です。〔氏には
「京大天皇事件五十周年考」雑誌『公論』2001年5月号の評論がある〕
自己紹介の後に、最年長の増山太助氏に開会の挨拶を兼ね発言を求め
る。

増山太助 (京大) 東京の生まれですが、大学は京大に進みました。
同じ頃の在学者で、後に著名になった人には、奈良本辰也、野間宏な
どがいます。盧溝橋事件の前の年でした。(周囲に助けられて年を思
い出し) 1936年、京大で11人のグループを結成、滝川教授が京大を追
われた日である5月26日に「平和と自由のための学生メーデー」を行
いました。私が司会ならびに責任者で、朝日会館で集会を行い、末川
(博) 先生に「学生に与う」という題で講演をしていただきました。
スローガンは5本、「満州侵略を止めよ」「侵略戦争反対」「自由と民
主主義を守れ」といったもので、三条から駅まで流れデモをし、スロ
ーガンを叫び、警官の弾圧を避けて、解散しました。このうちの15人
とは戦中もずっと連絡を保ちました。みんな戦場に送られたり、逮捕
されたり——私もです——しましたが、私が流売に入っていたので容

易に情報分析を伝達できました。このことを私は誇りに思っている。戦後、社内、まだ共産党が活動を開始していなかった早い時期に3人で細胞を結成、社幹部の戦争責任を追及、アメリカ従属反対を掲げて第一次読売争議を行った。翌46年5月、共立講堂で第2回の学生メーデーを主催、集まった東大の井手洋君、早稲田の姉川三郎君らに戦前私たちが発行した雑誌『学生評論』を贈呈。その際、これは運動の機関誌なのだから、研究雑誌にはしないでくれと要望しました。

第二次読売争議では早大の寺尾五郎らの援助をうけた。米軍指令部のニューディール派が本国に送還され、争議が終わってから党本部に入りました。学生運動の担当は宮本顕治さんで、今日初めて言うのですが、宮本さんとは初めから意見が対立しており、私には「学生運動にはタッチするな」ということで、文化部で中野重治さんの下で仕事をしました。そんなわけで学生運動は指導部の外から見ておりました。開成中学の後輩に安東仁兵衛君があり、成城高校の先輩に神山茂夫さん、また後輩に姉川君の兄さん、大山郁夫先生の息子がおり、それらの人間関係に助けられました。コミンフォルム批判では、私たちは無条件受け入れに反対、宮本さんは賛成で、私が学生運動の責任者になったのは50年分裂後です。対立は50年代の終わりまで続き、5全協後、6全協までの間、私はその総括を求めました。これをやらなければ、将来の党史に禍根を残すと主張しました。しかし取り上げられることはなかった。最後はその問題をふくめて共産党から除名されました。そんなわけで全国オールドグとして九州や北海道にも行ったのですが、全
体としては、党内にあっても、学生運動は外から見ていた感じです。
司会は、続いて同じく90歳を超えている、戦前の二高の活動家大村氏を紹介。物故者への黙祷がおこなわれた。この間、京大の武田正弘、水口春樹、東大の安東仁兵衛、高沢寅男、北大の宋、早大の牛山純一、津金祐近、法大の近藤巨上の名が挙げられた。京大同学会に自己紹介を依頼する。

小畑哲雄（京大）（京ことばで）8人の同学会役員が無期停学処分をうけましたが、このうち武田と私は別件「原爆展」に関連した道路交通法違反で逮捕されています、現場にはおりませんでした。6人は後に翌年4月に解除になりましたが、大學に出入りしていた2名——私はその1人ですが——は改悛の情が認められないということで、解除されませんでした。解除になった人も改悛したわけではありません。地下に潜った者がおり、病気になる者があります。要するに大學に来なければ、改悛したと認められたのです。京大には「放校」という他の大學にはない不埒にして重い処分がありました。二度と復学させないというものでして、水口君がこの事件前にこの処分をうけていました。事件による無期停学処分者の中では関西学連委員長をしていた玉井仁君、現在は山本姓ですが、彼がこれを追加されています。1人が死去、存命の7人中、青木委員長、玉井、法学部の古橋、および私が小畑の4人が本日ここに出席しております。このうちで当日現場にいたのは古木君だけです。期限付き停学処分者にいたっては多数にのぼります。

司会は、大學別に起立を求め、一般参加の短子賦戦市民の会メンバーを紹介。「早稲田が胸を貸してくれて」開催の運びとなった経緯を報告。

青木宏（京大） 私はあの事件について50年問語ったことはありません。今日初めて話します。色々と言われたものを読んできましたが、どうも私の体験とは違うと思ってきました。今日は私の体験に基づいてお話しします。出来事は1951年11月11日の現場のことと、その後のことと二つに分けられます。当日、天皇の到着と同時に毎日新聞の宣伝カーが君が代をがなりたて、それに対し学生たちが反射的かつ自然発

生的に「平和を守れ」という歌で応えた——というのが真相であり、それだけのことでした。同学会としては、天皇の来校には反対もしないが、歓迎もしないという立場でした。ただ当時の学生生活の実態とわれわれの気持を伝えたいと思い、公開質問状を用意しました。だれの要請によるか不明なのですが、数百人の制服警官隊がはいり、学生とのあいだに若干の小競り合いがありました。天皇の身体にも車にも触れなかったわけですし、天皇はいかなる打撃も蒙ることなく去ったのです。公開質問状について言えば、渡せなかったわけですし、それを直接渡せるとは思っています。学生の天皇にたいする気持、平和を願う気持を訴える用意をただけです。ともかく11月11日が無事に終わって、ひとつの小さな達成感があり、ほっとした気持ちでした。大学側も同様でして、「何もなくて良かったね」ということだったのです。話がこれですんでいたら、事件でも何でもなかったのです。だから私は、この出来事についてのパンフレット『平和を願うがゆえに』（副題は「京大天皇事件の真相」、同学会発行）を読むと、現場のことが詳細に書かれています。情緒的になりすぎている、今日読むと気恥ずかしいのです。

事態が〔事件に向かって〕動きはじめたのは、その夜からです。吉田茂と当時の与党であった自由党松田幹事長が会談。検察はなんとしなくてもこれを事件にしたかった。本当は不敬罪を適用したかったのだが、すでに無いので公安条例違反でやろうとし、12月8日まで捜査し、これも適用できないことが明らかとなった。「天皇事件」とはこの間に起こった出来事なのです。11月14日には斎藤国警本部長が「京大の良心と国民の真心が一致していれば、こういう事件は起きなかった」という談話を発表しています。これは警察トップの心のうちにまだ不敬罪が存在していたことを示したものです。26日に服部学長、学生補導部長、京都地検の牛島検事正、市警の永田、および私が参考人として衆議院法務委員会に喚問されました。服部さんは与党議員から徹底的

に吊るしあげられ、サンドバックのように叩かれた。「なぜすぐに警官隊を導入しなかったのか」と詰問されて、学長は「家から火が出て、自分で消せるものは自分で消すでしょう」と応じています。3時間におよぶ喚問でした。法務大臣の大橋武夫は「公安条例違反の適用について検討中であるが、大学当局は学生を処分せよ」と露骨に大学自治に介入しました。大学首脳は学内に入ると学生に吊るしあげられますから、学外の清風閣というところで対策会議を行っていましたが、取材していた新聞記者たちによると、リードしているのは文部省派遣の庶務課長であるとのことでした。同学会是他大学と違った自治会でして——その詳細はここでは省略いたしますが——それに対してその会議は「部屋をあげ渡して、解散しろ」という結論を出した。それとて正式に使者をたてて通知がなされたのではなく、夜中に学内にそうした看板が立てられたものなのです。私たちは事務所をあげ渡したら負けだと思っています。しかし19日夕に立命館大学の末川先生から私に電話があり、情勢が厳しいからとりあえずあげ渡したほうがよいとのこと、その忠告に従い、事務所をあげ渡すむねを伝えに学長宅に行きました。京都市議会は革新系が強く、共産党は無所属の人々とともに民統〔民主統一〕議員団をつくっていたのですが、私が説明にゆくと、その無所属の人々からも「天皇に対してなんという失礼なことをしたのか」と青筋をたてて非難されて孤立しました。共産党の議員でさえしれっとしておりました。ジャーナリズムの全体的調子は、投書にいたるまで「京大を潰せ」といった内容のもので、私たちはそれとの闘いに成功しなかった。公開質問状を広く社会にアピールすることができなかったのです。天皇信仰の岩盤の硬さを思い知らされました。

小畑君が述べたように、私たち8名は、11月12日、大学当局の「本学行幸にさいしての不祥事について、学生の本義にもとる行動と見なし、懲戒処分にすする」という通達により処分されました。しかしアリ

バイのある人たちがたくさんおきまして、論旨は支離滅裂、よくまあこんなものを出せたものだ、ナンセンスだと思っただけです。大學は権力のドーカツに脅えたのでして、天皇システムの残滓に恭順の意を表すために、私たちを人身御供にしたのです。「デモなどはなかったのに、地元新聞には「京大デモ事件」として報じられていたという。「天皇事件」として報じられなかったのは、プレスにも圧力が存在したためか？」

小畑 明日がその50回日

の祥月命日というわけです。

京都で『戦後史を語る会』

の名で集まりをもちます。

何かをやろうと思ってやっ

たことではありませんでし

た。4月、大學がまだ休み

の期間に京都市内の丸物—

現在は近鉄一百貨店で原爆

展をやり、5月にそれを横浜にもってゆきました。肝心の京大生が見

ていないので、それを秋の文化祭でやろうとし、11月10日の国際学生

デーにやろうと日程の調整にはいつていて、11日に天皇の来校が予定

されているのを知りました。このために京大での原爆展ができなかつ

たという経緯があります。8人は総務部の執行委員であるというだけ

の理由で全員が無期停学処分を受けたのでして、他の委員たちは処分

の対象外とされました。同学会には外に研究総務や文化総務があり、

研究総務を代表していたのが京大新聞会の中岡哲郎君で、彼が公開質

問状を書き上げて私のところに持ってきて、宛名が書いてないので私が

「天皇裕仁殿」と書きました。この世に苗字のない人がいることを初

めて知りましたね。どのように迎えるかということでは、「赤旗でも

って」といった強硬な意見もなかったわけではないのですが、青木君

が言ったように「歓迎もせず、反対もせず」という線に落ち着いた。在るがままの京大を見ていたかどうかということになった。

実のところ京大か、あるいは市労連が何かやろうと見ていた人たちはおり、新聞記者が足げく出入りしていました。しかし前日に刑事が出口に侍っていてパクラれ、当日はおきませんでした。したがって私にはこれ以上はない明瞭なアリバイがあるわけですが、強いて言えば、宛名を書いたということで、青木さんなどよりは、処分の対象となりえたでしょう。一番ひどいのは工学部の蔵野君という人物でして、彼にいたっては一月中実験にかかりきっていて、まさに学生の本分をまっとうしていた。しかし処分されています。彼は丹後の村の出身でして、本人は東京に逃げていったのですが、田舎のことで村は大騒ぎになった。後に彼はこのときのことを小冊子にまとめました。〔地元の要請により〕服部学長ははるばる説明に来て、村の公民館で主だった人々を前にこう説明したそうです。「世間の騒ぎが大きく、だれかを処分しなければならなかった。だからといって数千人の学生をひとりひとり調べるのは不可能。同学会役員の全員では多すぎる。総務部執行委員の8人がぎりぎりの線で、8人を全体の責任者とすることにした。つまり8人が天皇の前に立ちばだかつて非礼を働いたというのではない。教育的見地から停学処分にしたのである。さらに同学会を解散させた」。学長がこう言っているわけですから、青木さんが言うように、私たち8人は人身御供で首を世間に差し出したということになると思います。

事件後、大學は「計画的なデモンストレーションだった」と宣伝したのですが、〔計画的だったのは大学側で〕本館の屋上には16ミリのカメラを据えつけ、プラカードの動きを撮影していたそうです。文学部の学生たちが4本のプラカードを用意していて、そのうちの1つには「天皇陛下万歳と残した声が忘れりよか」という「露営の歌」の一節があったとのこと。す。「天皇制復活反対」もありましたが、「天皇



起立して話しているのが青木、その右隣に着席しているのが吉川。

制反対」ではありませんでした。大學側はこのプラカードの動きが計画的だったとされています。「平和の歌」も一人が歌い始めたから、みんながそれに続いたのです。明日の集まりの出入り回答に、「最初に歌い始めたのは私です」と名乗ってきた人がいました。残念ながらさる10月24日朝に亡くなりました。組織的、計画的なものではなかったために、ひとりひとり受け止めかたが違っており、ひとりひとりの天皇事件があるのです。明日その全貌が明らかになるでしょう。なお冒頭で述べました原爆展について小冊子を出したので、お求めいただければ幸いです。

司会 私も読ませてもらいました。小畑哲雄著『占領下の「原爆展」——平和を追い求めた青春』かもがわ出版1995年刊、¥550です。出口に置いてあります。

山本仁 (旧姓玉井、京大) 処分者のなかで、ただ一人私は放校処分になりました。歌を歌ったわけでもなく、プラカードをもったわけでもありません。直接事件には係わっていないので、当時関西学連委員長だったので狙われたのだと思います。その後、全学連副委員長の一人を、規約により、関西から出すことになり、〔1952年1月〕そのポストに就きました。〔後に、同3月から53年6月まで全学連委員長〕
司会 それでは「京大天皇事件」の東京での受けとめられかたについて、吉川さん、お願いします。

吉川勇一 (東大) 当時本郷で中央委員会議長をしております、京都が大変なことをやっていたと思いい、事件からまだ一か月も経っていません頃だと思うのですが、同学会から青木さんをお招きし、話をうかがいました。それ以来実に50年ぶりに今日お会いし隣り合って坐っております。東大での受けとめられかたを問われましたが、そのためには共産党の事情を話さなければなりません。

50年にコミンフォルム批判により共産党の分裂があり、その後、国際批判で国際派が形式的には自己批判し復帰するのですが、当時いわれていた言葉でいえば、所感派内では、彼らには心を許すな、また何かしでかすから信用してはならない、山村工作隊などに出して鍛えなおせ、学習をさせてレポートを書かせろと言われていました。駒場〔前期教養課程〕はほぼ全部が所感派、しかし本郷は、そこにいる丸さんもその一人ですが、百何十名という党員のほとんどが国際派でして、所感派は10人ほどにすぎなかった。中央の指令は、増山さんが出されたかどうかは知りませんが、国際派には大衆団体の役員には就かせるな、というもので、私は入党後半の若造だったのに、他に人がいなかったのもで中央委員会議長になりました。10月には全学自治会と文化団体連合会の主催になる南原繁(総長)さんの送別会があり、2500人ほどが集まったのですが、そこで送別の挨拶をしました。生まれて初めての講演を、冷や汗を流しながらしました。何をしゃべったか覚えていません。安東仁兵衛にヤジられてカッとなりあったものです。インターナショナルをもって送るとというのが再建細胞の決定だったのですが、そして実際、歌い始めたのですが、蛍の光に打ち消されて、後で党派性に欠けると自己批判させられました。東大は共産党の党内抗争のためにまとまって運動がでける状態にはなかった。そんななかで京大の事件の報に接したわけですから、学内にまとまりと統一がある京大はスゴイと思った。どうしてあんなことが出来たのか知りたく、それで青木さんに来てもらったのでして、その後私たちは京大支援の運動を起こそうとしていました。その矢先、52年2月11日にボロボロ事件が起こりました。東大に入りこんだ私服警官を捕え、翌日に学生が捕えられた事件です…。メーデー事件があり、そこにいる吉田さんの早稲田で事件が続いた。学生運動はその後に一時的に崩壊するのですが、しかしそれに参加していた私たちは反戦を掲げ、せつかく手にいれた民主主義を朝鮮戦争のなかで失いたくないと思っていたの

であり、それによって世の中を変えようとしていたのです。私はその後、65年代以降長くベトナム反戦運動に従事したのですが、そのときも若い人たちとやりながら、世の中を変えられるかなと思っていました。それに比して最近数年のすさまじい状況ですね、閉塞感だけがあって何をやって… 予想もしないことが起こりました。自衛隊が海外に出てゆくんなんて、5年前には考えてはいませんでした、残念ながら。しばらくは少数派に徹する以外にないのかなと思っています。

実は昨日もその文京区民センターで報復戦争反対のシンポジウムをやったのですが、今でも、70歳になりながら政治にかかわって生きております。こういう状況では、非暴力には徹しますが、市民的不服従を貫き、君が代、日の丸の強制には反対し、なんでも破れば良いとは思いませんけれども、良心に反する法律には従わぬつもりです。お手元に緑色のパンフレットをお配りしましたけれど、市民的不服従の運動が実践的に必要になったと考え、「君が代、日の丸に反対する意思表示の会」というものを立ち上げあげ、今でも続けております。天皇事件に関心を有する諸先輩が参加してくだされば嬉しいと思います。天皇事件が今日のどのような意味を持つかということを、歴史家、政治学者にはきちっと分析してもらいたい。私は学者ではなく運動家ですので実践的にどう生かしてゆこうかと考えているところですので、ご意見を聞かしていただければありがたいと思います。

司会 吉川さんは謙遜して話されていると思います。京都大学同学会と学園新聞が制作した『平和を願うがゆえに』1号・2号は、ミニコミ出版でしたが20万部以上売れたと聞いております。しかし亡霊はまたよみがえるわけですから…。

佐藤道夫 (東北大) 私は検事を40年やってき、吉川さんとは反対に、「悪法もまた法なり」と考えて生きてきた者です。京大天皇事件

のときは東北大の1年生、さすがが京都は違う、昭和の初めから革新の旗を掲げてきた、天皇に公開質問状を出すとは… と大いに考えさせられ、限らない尊敬の念を抱いたものです。

S32年に検察庁にはいり、1期先輩に藤永幸治という人がおりまして、ある時、あの人は京大天皇事件のさいに検挙されて取調べをうけたことがあると聞き、ほんとうかなと思い、ご当人に質したことがあります。事実であるということでした。首謀者からは程遠く、付和雷同のちよっと上くらのところだったのが、そういう日にあい、「今回は勘弁するが、以後気をつけろ」と言われて釈放された。このためには司法試験に合格しても修習生に採用されず、その理由をきかされて、「どうすればよいのか」と問うたところ、「反省することだ」と言われた。1年間反省し、翌年最高裁に採用願いを、上申書添付して提出、採用された。その際に、「恵まれない人々のために弁護士になろう」としていた彼は、検事志望に方向転換したらしい。「厳しく法を適用する検事になります」と上申した。以来厳しい一方の検事となり、特に学生運動関係—全学連関係で色々ありました—で厳しかった。私はいいかげんな人間ですから「厳しすぎる」と申しますと、「いや、重い処罰をすることは、人間をよりよく完成させるのに好い方法なのだ」(笑声)と申しました。そういう哲学の持主でした。それなりに検察では評価されまして最後は検察ナンバー2の東京高検検事正にまでなった。私はがんばったのですが、札幌どまりでした…。このようにみずから学生運動にかかわりながら、180度に転換して生きた人もいるということを申しあげます。左に行く人ばかりでは面白くない。右に行く人がいてもよい。人生は色々な人がいて面白いのだと思います。今年の初めに亡くなりましたが、存命でしたらこの席に連れてきたかった。私以上に叱咤激励したのではないでしょうか。学生時代には暴れに暴れて、その後は検事になり、今度はそうした学生を厳しく取り締まった、そういう人物もいたということを記憶に止めて

いたideきたいと思ひます。

10日ほど前のことになりましたが、参議院の特別委員会では今回のテロ特措法なるものについての連合審査で1時間の時間をもらひまして話しました。NHKテレビが放映してありまして、皆さんのなかにもご覧になった方もおられると思ひますが、その時の私の意見陳述のさわりだけを紹介させていただきます。

ご承知のように第1次世界大戦、あれはテロで始まっているのですね。オーストリアの皇太子夫妻がバルカンに行ったさいに、スラブ民族のテロリストが爆弾を投げつけて殺害した。たった2人だった、今回は6000人である。しかし帝国主義の時代ですからね、2人は国家そのものだったのですね。大逆事件のときには、明治天皇の暗殺を計画しただけで、計画したといわれただけで、幸徳秋水以下24人の無政府主義者が死刑判決をうけ、そのうちの12人は即刻死刑執行となった。あの時代としてはあたりまえのことだったのです。今の目であればおかしいと言つても始まらない。そういう時代だったのです。ですからオーストリアも一も二もなく宣戦布告し、ゲルマンとスラブの殺し合いになり、世界大戦となった。終わつてみたら死者だけで800万人でいた。それでアメリカのウィルソン大統領が、これからはこうした問題で軍事力を使うのは止そう、話合で解決しようと言ひして、国際連盟を立ち上げたのですよ、あのアメリカが。しかし国際連盟は日本が満州問題で脱退したりし、力が弱まつて、第2次世界大戦が始まつた。終わつてみたら3000万人死んでいた、驚くなかれ。4000、6000人などではないのです。それでまたアメリカが、今度は国際連合でやろうと言つて、国連を立ち上げたのですよ。そして50年たったところ、そのアメリカが6000人殺されると、血相を変えて、これは戦争だ、報復は当然の権利だ、犯人はあのタリバンだ、いや、何と言ひましたっけ、「(「オサマ・ビンラディン」の声) それをかくまうものも同罪だ、とブッシュ大統領が言ひ出したのですよ。「かくまう者も同罪だ」な

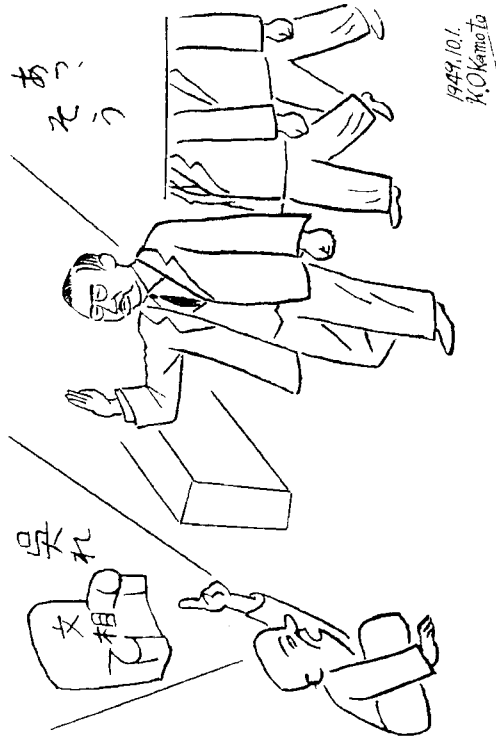
どというばかな法理論はありません。世界中の法律家が笑ひだしてゐるのに、議論をつくすこと全くなしに空爆を始めてしまつた。オウムだつて6か月かかつた。麻原某など、さつさと出ると首にすればよいようなものですが、一つ一つ証拠を積み重ね、法にのつとつて処理しているもので時間がかかりました。だからアメリカは彼が犯人だと思へば、証拠を提出して国際的な裁判にゆだねるべきなのです。麻原が犯人であることは日本中が知っていました。しかし近代的な法治主義といふのはこういうことなのです。

歴史的には、拙速な吊るし首の反省から法にもとづく裁判が生まれました。ご記憶の方もあらうかと思ひますが、20日ほど前に報じられたところによれば、タリバン側は「証拠を示してもええ、第三国に引き渡す」と言つたそうです。あつちの方が近代的法を知っている。場所はスイス、ベルギー、アラブのなかでも中立的なエジプトを希望しているらしい。ただしアメリカは嫌だという、あたりまえのことです。ブッシュはどうですか。「ナラズ者が何を言うか、犯罪者の言うことは聞けない」と言っている。とうてい文明国家とはいへません。この問題ではブッシュはナラズ者であり、アメリカは文明国家ではない。それでいて、どうしたらアフガニスタンは良い国になるか、などと議論している。これはテロ事件であり、アメリカは被害国なので、アメリカはそんなことを考えなくてよいのです。この事件は国連に裁判所をつくつて裁かれねばなりません。証拠を提出して、犯人と思われているあの男を法廷に出し、弁護士をつけてあの男の弁明も聞いて裁かねばなりません。

参議院の特別委員会ではそう申しましたのです。小泉さんは小さくなつて「高尚にして経験のあるお話、深刻に受けとめさせていただきます」と答えていましたが、その後あまり動いている気配はありません… 第1次世界大戦から100年近く経過しながら、事態はどうもヤクザの喧嘩のようになってきて嘆かわしいことです。今度の事件は、

イスラム・キリスト教間の大戦争予防のための、絶好の機会なのですから…。

司会 10分間の休憩にはいります。会場出口近くに当時の資料、関連著書を置いてありますのでご覧ください。



〔京大の天皇事件より遡ること2年前、1949年10月5日、日本大学記念祭の日に、昭和天皇は東京神田の同大学を訪ねた。呉文相日大総長の要請によるもので、隣接する中央大学の当時の中央委員会議長、岡本一雄氏が吉田嘉清に寄せた手記には「日大ではその費用を捻出するために、各教授の給料から1割を大引きし、学生からも寄付を徴収して総額当時の金で750万円を計上」したという。「米よこせメーデー」が行われていた頃のことなのだから、異常であった。呉総長の文相への野心のなせるわざと囁かれていた。画才のある岡本氏は、呉がそのポストを「呉れ」と言ったものとして、上の風刺漫画をみずから大き

なプラカードに描き、署名して中大正門に提示した。当時東京の学生運動のあいだでは広く知られた漫画であって、本フォークラムのパネルレットにも収められた。また中大出身者によるこれに関連しての発言も予定されていた。それが成されずに終わったのは、まったくのこころ時間切れによるものであった。

10月29日、中大法学部教授会は岡本氏と日共中大細胞キヤップ木内俊夫氏の2人の除籍を決定し、発表した。中心人物であった片山理事は「国の元首や他校の総長を風刺するとは学生にあるまじき名誉毀損行為だ。沙汰の限りである」と言ったという。その頭脳にはまだ旧憲法が生きていたのであった。自治会中央委員のひとり、旧華族の血をひく姉小路敏博氏（故人）が本館大煙突の天辺に登り、ハンストをもって抗議。岡本氏は「漫画で退学」が縁で画家として出版社に入った。〕

中島誠（早大）（かん高い声で）戦後、天皇は現人神から人間になったのか。先ほどの京大事件のコメントをなされた方々が、「失礼だ」という言葉を使われて処分されたということを描べられました。人間が人間にたいして失礼だということではないのでしょうか。人間が人間にたいしてなした行為であるならば、失礼とか、無礼とか、礼を失しているとか、いないとか、その基準はどこにあるのか、私にとっては疑問であります。中野重治は戦後、好短編『五勺の酒』のなかで「皇族の何人かが臣籍降下ということをやっている。臣下の籍に降下するのだ」と記し、「彼らの臣籍降下を許すまい」と書いております。つまり臣籍に降下するだけの値打ちのある人間として、彼らは、皇族を含めて、何をやってきたのか。〔何もやってこなかった者たちを受け入れるわけにはゆかないので〕「臣籍降下返上」ということを、中野は『五勺の酒』のなかで主張しております。

また天皇は国事行為をしてもよろしいが、国政行為はしてはならない、とされています。しかし国事行為と国政行為がどこでどう違うのか、この双方の関係は曖昧模糊としております。国事行為だけをやっている王や君主は世界にはいくらでもいて、いまだに王国を維持しております。1868年の明治維新からおおよそ130年たちましたが、私たちは今日なお、天皇という存在を、皇族をもふくめて認めなければならぬのか。なかならず象徴として認めているのか、認めなければならぬのか、国の基本法である憲法に基づいてそうあらねばならないのか、さもなくばそれを棚上げしてしまっただろうか。天皇と皇族の存在そのものと天皇制の存続という問題はどこがどう違うのか、先ほどどなたかがおっしゃったように、天皇への信仰というものは日本人において根強い、なるほどそうかもしれません。

しかし、たとえば、私が記憶している限り、戦後、日本の共産党は途中までは天皇制打倒の旗をメイン・スローガンの第一のものとして掲げておりました。しかしそれをいつのまにか降ろした。そして天皇宗という一種の宗教にたいしては、粘り強く、長い時間をかけて改正し改造してゆかなければならない。そのためにはいわゆる民主主義革命というものを何段階もおこなってゆく必要がある、ということを綱領化することになりました。天皇家という形でわれわれは信仰してきたのか、そのような歴史的事実が古代以来かりにあったとしても、そういうことでよろしいのか。天皇制打倒の旗を降ろし、アメリカ帝國主義打倒の旗を掲げ、さらに色々な形で変貌してきた、私自身参画してきました、長い歴史と伝統をもつ政党にたいし感慨無量なものがあります。96歳で今年亡くなった石堂清倫さんの談話録（講演記録『20世紀の意味』市民センター政策機構発行）を吉田さんなどから頂いたのですが、これを読み直そうと思っています。

昨夜のNHKは長時間にわたって『聖徳太子』という大ドラマを放映いたしました。そして「和をもって尊しとなす」という1条が、い

かにして厩戸皇子の苦悩のうえに形成されたかを切々と訴えて、緒方拳演ずるところの蘇我馬子との対決を描いておりました。なぜいま聖徳太子なのか、なぜいま17条憲法の第1条を麗々しく飾らなければならぬのか。一方、今年の大河ドラマの主人公北条時宗においても、同様な問題が現われております。「まつりごと」と思想・信念とは違ふのだ。人を殺してはならない、傷つけてはならない、他国に攻めこんでばならない。しかし自国を守るまつりごとをするためには闘いをする時宗を見ますと、なんともいえない感じをうけるのです。政治と思想が今日におけるほど乖離している時はないと思います。戦後の諸問題がすべて、吉川さん指摘のように、ひっくり返ってしまっただけで、55年間おれはいいたい何をやってきたのだろうと苛まれる現状があります。この打開はいかにして可能でありましょうか。

司会 当日のプログラム上の、1989年土本制作の日本アファニスタン合作映画『よみがえれ、カレーズ』（記録社・シグロ作品）紹介のページを示す。

土本典昭（早大） 12年前、アフガンの人々の本当の顔と意見を知りたい、と思って入りました。それは、ちやうど今と似ているのですが、アフガンの将来をどうするかということが論議されていた時でした。10年近く政治をしております共産党系といいますが、人民主義の政權ナジブラが自分の地位には恋々とはしないと云って、反対勢力のグループだけではなく、アフガンにありまます4つの民族、すなわちパシュトゥーン、タジク、ウズベク、ハザラを融合して国民和解をしたいということで、一切の過去の戦いは論ぜずということで、選挙による協議制の国造りを宣言し、政權を放棄した年でした。しかし10年におよぶしこりは重くて、ソ連軍の力をバックにしていたということ、彼らの意見はなかなか承知されませんでした。しかしソヴィエト

が帰ったならば2日で倒れるだろうといわれていたナジブラ政権はその後3年血みどろの派閥闘争をくぐり抜けて、そして終わったわけだ。

しかしそのソヴィエト軍の撤退のときに、アフガンには或る風通しのよい一陣の新しい風が吹きました。そのときに私はアフガンに入っただけで、軍とか戦争ではなく、人々の生活がどんな状態になっているか、どんな戦いの傷跡があるか、どういうふうな人間が希望をもっているかを訊ねて、作成したのがこの映画なのです。それが今、ひとサイクルを巡ってきたと感じます。アフガンは惨たんたる国になりました、この国をどうしようかとだれもが考えることとなった。

ソヴィエトの撤退後も13年も内戦が続いた理由は、パキスタン、イラン、サウジアラビア、ソヴィエトが残した膨大な武器、さらにはアメリカが開発して与えたきた野戦用の大量の兵器が間断なくアフガンに流れていた、その補給がそれぞれの国の思惑によって続けられてきたことにあります。それによって戦いが惨たんたるものになった。今日、寒心にたえないのは、北部同盟を支持する側にロシアが入り、ウズベクスタン、タジクスタンが入って、完全にひとつの広域な、かつてのソヴィエトの参戦に似たような武器の補給がおこなわれるようになり、アメリカとの共同作戦が行われるようになったことです。

しかしアフガン国民は外国勢力に後押しされた政権を認めませんから、もしもさまざまな爆撃によってアメリカが決着をつけたとしても、アフガンは絶対に内戦を停止することができないと思います。したがって爆撃は止めるべきであり、アメリカのみならず各国は武器の提供を止めるべきです。そうしなければ話合の糸口さえ見つけることができません。私はアメリカの報復にはもちろん反対であります。ビンラディンをとくに支持するわけでもありません。アフガニスタンの将来が民族自決の線で実現されてほしいと願っています。それがこの映画を作った当時の私の気持であり、また現在の変わることのない

気持でもあります。

池山重朗 (東大) 小泉首相の最近の言動を見ると、戦後日本の教育が誤っていたと感じます。あの戦争に対する歴史認識が根本的に間違っていると思う。それは彼の靖国神社問題にも現われている。ブッシュの新しい戦争論を真にうけて、テロを戦争と同一視とは正気の沙汰ではない。テロはあくまでテロであって、治安対策として処理すべきなのに、自衛隊の海外派兵という重大な政策転換に飛躍させたのは許せません。

京大の方々の「意図してではなく、結果として起こった」「歓迎もしないが反対もしない」という報告にはいささか意外の感じをうけました。力関係ということもあつたと思いますが、天皇の戦争責任を追究する、もっと堂々と「戦争の責任がまだすんでいない」と指摘する運動になつてもよかつたのではないか。1951年大卒1年のときこの事件の報に接し、京大を理想化してよくやつたと思つたが、今日の報告を聞くと、もっとやつてもらいたかつたと思う(笑)。

司会 ご指摘の諸問題については、われわれはこのフォーラムの準備の過程で、若い人たちに知らせるために、沖縄に、関西、東京、ソウルに、国際日本市民法廷をつくる必要があるのではないか、ということをお話してきているということを申し上げておきます。

犬丸義一 (東大) (指名されて) 病気で手術をうけ入院中として、外出許可証をもらってやってきてました。ただし二次会には(飲むしぐさをして)出られませんか。古い懐かしい友人に会えると思つて出てきたのでして、会えて嬉しい。玉井さんとはまさに50年ぶりです。東大に一九九〇年という同窓会がありまして、文集を4集まで出して、5集が来年年々々に出る予定で、これが最後になるので、これに第一次全学連の年表を作成・掲載しようとしているのですが、なかなか出来あ

がらない。なかなか記憶では書きあげられない。肝心な問題のひとつである戸塚・不破・高沢事件が、日付の段階で当事者間で2月13日と14日に割れています。新聞に当たらなければならぬということになってきました。大学新聞は全部見たのですが…。色々と確認しようと思っているうちに亡くなる人が続出して、支障をきたしている。全学連書記長だった高橋英典君しかり、小林栄三君は「3年間は大丈夫なので秋には会おう」と言っていて7月に急死しちゃった。ともかく残された最後のチャンスで、この会だって、この次ぎに何人出られるのか分らんわけでしょう？（笑声）入院しているの、多少悲観的なことを言っているかもしれませんが、それはご勘弁願うことにして…。いずれにしても急いであの頃の歴史をまとめなければいけない、というのが職業的歴史家としての私の歴史をまとめたければいけない。という中島さんのさっき言われたようなことはあまり議論したくないな… すこし違うのですよ。「共産党は」天皇宗とは言っていない、「半宗教、なかば宗教的なもの」と天皇制にたいする意識を言っているのですから。これが野坂・宮本以来の系譜でして、私も天皇制の歴史を書く予定にしていますから、それはなんとか——そもそも歴史学にはいったのはそのためなのですから——仕上げなければ、死んでも死にきれません。原稿は6割まで書いてあるんだけれども、新しい研究が出るもんだから、書き直さなければならぬということ、出せないでいるのです。そういうわけで、どうしても皆さんに会いたくて出てきたというわけですね…。高橋彦博さんのともかく論文が出て、これには若干の異論があるから、本人には先日電話で伝えたのだけれど…。ともかく『占領下の学生運動』の兄とおしは立てたいというのが、主観的状况でして、これぐらいで勘弁してください。

西村汎子（東大） 犬の半分を支えている女性の出席がこんなに少ないのは、やはりあの時代の学生運動の実状の反映でしょうか。大學生二法案に反対して処分されましたが、半年後に解除になり復学しました。吉川さんは「謝らなかつたので、解除にならなかつた」と言われ

ましたが、私は謝らなくても解除されました（笑声）。高校で16年、短大25年教鞭をとり、ずっと婦人問題に取り組んできました。昨今は世界も日本も気がかりですが、民衆はけして屈しないという信念で今後もやってまいります。

高橋彦博（早大、法大）（沈んだ低い声で）ついこのあいだも犬丸さんから電話がかかってきて、「お前の書いたものは、ずさんだ…」と怒られました、延々と犬丸説をうかがったわけでありまして、「カードが無くなったからな」という電話の切りかたは初めてでした、そんなに長かったのです、〔あの〕当時のこと「学生運動」を話していました。最近、早稲田の学生運動の記録である『早稲田・1950年・史料と証言』が6冊にまとまりまして、それを詳しく検討する機会があったわけですが、そこでひとつ気がついたのは、第一次早大事件は、東大ポロ事件も、第二次早大事件も含めまして、学生たちが意識するしないにかかわらず、当時の学生運動は、新憲法の定着過程をになう大衆運動になっていたのではないのかということでした。（拍手）。対面の席の、吉田の「賛成だな」、犬丸の「それは賛成だ」の（声）。今日、京大同学会の運動を振り返りまして、ここにある天皇にたいする公開質問状を見ましても、天皇制に反対だったのではなくて、天皇制を一般君主制に切り替えようとする運動になっていた。京大生の質問の内容は、天皇制打倒以上に共和制のなかに組み入れ、たんなる君主制として定着させようという、当時の動きだったと見ることでできるのではないか、と思います。

話は飛びますが、今年はちょうど社会民主党の創立百年にあたって、その記念の集まりもあったのですが、社会民主党の百年前の、民主主義を経とし社会主義を緯として進むというあの理念はどこにいったのでしょうか。それは社会党にも共産党にも受け継がれていないのであります。学生たちは気がついていなかつたわけですが、

戦後の全学連を中心とする運動のなかに、あるいは京都の学生たちの運動のなかに、社会民主党の理念が生きて、新憲法を定着させる運動として展開されていた、と私は思っております。しかしこれは歴史の皮肉でありまして、当時の学生たちはアメリカ帝国主義反対というところしか考えていなかった。しかし結果としては、そうではなかったのではないか、という見かたをしております。

青木 先ほど私は、この席にどういう方々が出席なさっているのかをよく心得ぬままに、自分の体験にたって事件について報告いたしました。しかしもう少し広い観点から考え捉える必要があると思いますので、補足させていただきます。あの年あの時期に、なぜ天皇が京都に、つまり京都大學に來たかという問題が残っているのです。講和条約が締結されました。これは天皇事件のおこる3か月まえのことです。マッカーサーの全・支配が終わって、形だけにせよ独立するわけでした、日本がどう「占領下から」脱却してゆくかについて、当時、権力サイドは「今後について」相当に神経を使ったのではないのでしょうか。当時、労働運動・学生運動をつうじて日本で共産党がいちばん強いのは京大であるということになっていました。主流派とか、所感派とか、言いかたは変わりますが、京大はこれ一本にまとまっていて、200人の党組織のうち国際派は10人あまりにすぎませんでした。党分裂は無いにひとしく、相当に強い力をもっていました。しかしそれは1951年の4月から5月くらいまでのことでした。その後、共産党の四全協・五全協—どっちだったか覚えていませんが—などによって、その方針に基づきどんどん学生が引き抜かれてゆくことになった。このため同学会は機能しなくなっていました。規約により委員長は3回生の秋に交代することになっておりましたが、役員会が成立せず、周囲に頼まれてやむを得ず委員長を続けていました。〔小畑氏は先の発言の省略部で「委員長候補の武田氏が地下に潜行したので、青木氏が続投を

余儀なくされ、人生も狂わされたはずである」と述べていた〕

そういう状態で私は事件を迎えたのです。権力の側は、学生運動の拠点である京都大學に天皇を連れてゆき、事件を引き起こし、〔京大細胞に〕一撃を加えてやろう、という意図をもっていたのかもしれない。

ついでながら申しますと、京都は徹底的にアマチュアイズムの所です。東京は、吉川さんのように、卒業後もいまだに頑張る人がいます（「京都にもいる」の声）…。東京で親しくさせてもらっていた安東仁兵衛さんも、亡くなるまでそうでした。京都は学生時代にはやるけれども、それもパパーッと派手にやるけれども、卒業するとあっさりと外の仕事に移ります。私もまた…。京都に較べると、東京の人はしつこいなあ（笑声）と… 本日ここでの感想です。

司会 まあ、東京は権力の膝元でありますから。

後藤昌次郎（東大） 忘れがたい出来事があります。1948年の〔一高〕祭祭りのことです。その前夜、各部屋でそれぞれのデコレーションの祭生への展示がありました。祭生以外の一般への展示は翌日からです。私はぶらぶら歩いていて哲研の部屋に入りました。当時、この哲学研究会、社会科学研究会、中国研究会の三つが共産党系のグループでした。そこに行ったらね、こう書いてあるわけですよ、皆さんご承知だと思いますが、「君主制の本質とは何か、君主とは何か、それはセックスである、なぜならばセックスによって初めて自分たちの後を継ぐ玉体を生むことができるからである」と書いてある。マルクスの—何からだったか忘れましたが、ヘーゲル批判の何かからでした—有名な言葉が掲げられてあった。

〔出発期の論文のひとつ『ヘーゲル国法論（第261節—第313節）の批判』につきの一節がある：「君主の世襲制は君主の概念から出てくる。君主は特別に類全体から、すべての他の人から、区別された人だ

とされる。では、一人の人の他のすべての人からの窮極の固定した區別点は何なのか？ 体（からだ）である。体の最高の機能は性行為である。それゆえ国王の最高の憲法的行為は彼の性行為である。けれどこれによって彼は一人の国王を作って、己の体を伝えてゆくのだからである。彼の息子の体は彼自身の体の再生産、一個の玉体の創造である」大月版訳]

それには私はまったく同感だった。それは、絶対天皇制であろうが、象徴天皇制だろうが、いずれにも通用する真理だった。ところがね、そこに、それを何と言おうかな… 視覚に訴えるものとした漫画が描かれてあった。馬がセックスをしている漫画です。上に乗っている馬の顔はヒロヒト天皇で下のが皇后の顔。私はね、これはまづしいと思っただ。それで「この言葉にはまったく同感だが、この漫画は良くない、これはマルクスの言葉を貶めるものでもあるし、同時に君たち自身をも貶めるものではないか」と言った。そうしたらそこに居った連中がね、法政の教授になった同じくラスの岡田君もいました。血相を変えてね、「なにお、この反動野郎」と言った。（笑声。「高沢もいたんだ」と犬丸氏が隣の吉田に言う）多勢に無勢でどうてい納得しても、ええような状況ではなかったもので、私はしかたなく戻った。翌朝、寮祭が始まってから、気がかりで見にいったら、文言は残されていたが、漫画は取り外されていた。「どうして外したのだ、昨日はあんなに反対したのに」と問うと、学生課長をしていた真下信一さんが、私が戻ったすぐ後に来て、私と同じことを言ったらしい。同じことを言っても、言う人によってぜんぜん違う結果となる（笑声）と痛感した思い出があります。〔後に本年1月の東大・九会の席で、岡田裕之氏に後藤発言について話すと、「僕もそのことは書いていますよ」と笑っておられた〕

今回の問題について言えば、「同時多発テロ事件」という言い方はまったく無意味で、同義反復ではないかと思っています。だって

「同時多発」といったような言葉はないでしょう。「多発」だから「同時」ということになるのですが、それよりは、例えば、「アメリカ…中核同時爆破事件」といえば、中身が出てくるのです。そしてビンラディンとアルカイダですか、あれらが犯人だといって、証拠も確かなのににそういうことをいって、民衆を傷つけ爆撃をどんどんやっているわけです、アメリカは…。

私はね、この事件そのものは残酷な悲劇だと思っている。問題はね、あのような残酷な悲劇を二度と繰り返さないためにはどうすればよいのか、根本的な解決方法は何か、ということとです。病気の原因は何か。それはアメリカの、昔の言葉でいえば霸道、今日いうところの覇権主義ですよ。南北問題を非常に深刻にしているアメリカにある。彼らが犯人かどうかわかりませんが、かりにそうだとしても、彼らと同じような哀しみと怒りをもった人々は、今後立ちあがります。

酒井大蔵（京大）（青木氏らの対面の席から、生粋の京ことばで）

私は京都生まれの京都有ちなものです。天皇が京都に来たのは、事件のときが二度目なのでして、戦前、紀元2600年の年、すなわち昭和15年、私は小学校4年生でしたが、来ております。京童の小学生たちは烏丸通りを三条まで出向いて整列して迎えました。昭和1桁生まれの私たちは知っているとありますが、目迎、目送という言葉がありました。45度の礼のあと首を廻して迎え、また送るのです。そういう形で私たちは天皇を見ております。先ほどの馬の話ではありませんが、三条までの途中、子供同士で、天皇はどうやって子供をつくるのかが話題となったことを覚えています。「そうか、わんちゃんやにゃんちゃんと同じなのか」ということになりました。そういう次第で私は天皇を見ていたので、あの日、天皇を迎えた2500人のなかには加わりませんでした。そういう者もここに出席しているということを知っていただきたい。

京大の学生は1万数千人でしたから、迎えなかつた者が多数を占めていたのです。京童はほとんど行かなかつたと思いますよ。2500人は、まだ犬皇にお会いしていない地方の秀才の方々だったのでないでしょうか（爆笑）。皮肉ではなしに…。

天皇を初めて見てから5年目の8月15日、私が在校していた軍の学校の校長は、陸大を首席で出た人でしたが、〔放送が雑音で聞き取れなかったためか〕聖戦の完遂を説きました。私は降伏という言葉は日本語には無いと信じていました。それから2時間して降伏の放送だったことを知ったのです。

私に180度の転換が生まれました。私としてはもう1日1時間といえども、これ以上あの人のために費やしたくはなかつた。在学中、私が欠席したのはあの一だけなのでして、先ほど工学部の方で実験していた人の話が出ましたが、私は家におりました。もうそのころには大石義雄さんの憲法、東京大学の注解日本国憲法全5冊を読み上げておりました。

憲法の前文に国民主権とある。それで、いくら象徴ということになっていても、法学部なので私は日本を主権在民の国だと思ってきました。ところが先年その虎ノ門の教育会館で、上山春平の話を聞きました。日本を「君主制の国である」と言うのです。文学部の先生はそう言った。外国から見ると、そう見えるらしいのです。基本法のなかで、日本は君主制の国なのか、主権在民の国なのか、曖昧にされていると痛感します。そのところを読んで分るようにならなければならない。そうしなければ物事の筋目を子供に教えることができない。無防備の中立主義でも軍国主義でも、どちらでもいいですよ。単純明快でだれにも分るものでなければならぬ。日本はそのところをクリアできずに、55年を過ごし、21世紀を迎えることになってしまったのではないのでしょうか。

司会 陸軍の学校におられた方の話が続きましたが、ここで海軍の学校を出られ、今は活発な市民運動を展開しておられる信太さんをお願いします。

信太正道（京大、逗子厭戦市民の会） 海軍兵学校を卒業して京大に進み、50年に卒業し、海上保安庁に入りました。そんなわけで51年の事件のときは、朝鮮戦争で掃海任務に就いて参戦しておりました（笑聲）。京都は警官が学生に優しいところでした。横浜から米を持って帰っても、一般の人は片っ端から調べられていたのに、学生は悪いことはしないということで大目に見てくれました。皆さんそんな経験はございませんか。事件後、警官は学生に厳しくなったのでしょうか。朝鮮から帰ってきて海上自衛隊の設立準備室にいたのですが、職場の同僚に芦田均の息子がいて、あの頃で車を乗り回していました。血のメーデーを私は見ましたが、彼は熱烈な右翼でして左翼と乱闘をして、血まみれになって帰ってきたものです。また招かれて芦田家にゆき、親父の話を聞いたことがあります。憲法に関連して交戦権云々の話をしておりました。敗戦時は特攻隊員で日航の機長もやってきましたが、今は厭戦市民の会を立ち上げて活動しております。右翼からは極左と狙われているのですが、厭戦ほど戦争家にとって怖いものはなく、いちばん強い反戦であり、永久に不敗です。やがて一周年を迎えるのですが、アキヒトの誕生日に土本先生を迎えてアフガンの話を聞く予定です。

陳栄芳（チン・エイホウ、東北大） 本日このような席に出席できたことを大変嬉しく思います。私は台湾生まれ、14歳で日本に留学し、中・高・大學教育をうけた後、北京に行き、35年間北京放送に勤務、対日放送に従事、現在は日本に戻っております。日本の植民地だった子供のころの台湾について紹介したい。台湾は（日清戦争の結果）日本に割譲されたのですが、台湾征討軍の総司令官は北白川宮でした。

彼は戦死ということになっていますが、実際は夜襲をうけて殺害されています。小さな町にいたるまで各地に神社がつくられました。そこで祭られていたのは天照大神と北白川宮でした。それだけではなく総ての家に神棚が作られることになりました。日本に来て驚いたのですが、神棚を持たない家が沢山あるのに、台湾ではそれを持たない家は無かったのですから、皇民化運動は徹底していたことになります。大森を聞いてみると天照人神の札が入っていました。学校の朝礼では君が代の斉唱と宮城遥拝が義務づけられ、実際には差別があったのですが、日本臣民との一心同体が求められました。台湾語は福建省の言葉なのですが、学校でそれを話すのは禁じられていて、話すと罰金を払わされました。天皇制は植民地支配の武器であり、その精神的支柱だった。しかし予息である現在の天皇は、中国を訪問して日中間の過去について「悲しいことです」と言っただけで、謝罪はしませんでした。

吉田嘉清（早大） 長

時間ありがとうございます。出席者は70名に達しました。私たちの予想を上廻る人数でして、これもいきさんを始めたし、た仕掛人の人たち、および出席の皆さんがたの協力のおかげであります。

阪大出身の元広島大平和研究センターの森祐二氏が見えています。大阪吹田事件の被告であり、一貫して平和運動で頑張っている方です。中央大グループが見えています。49年天皇事件で漫画で（笑いながら）見事に退学になった岡本君、見えていますね（場内から「ハイ」の声）。



左から犬丸、起立して話している吉田、その右に中島、すこし離れて右端に司会のいき一郎。

戦後の学生運動は東北大の反イールズ闘争に始まり、全学連・早稲田のレッドパージ反対闘争、東大ポロ事件、京大天皇事件、血のメーデー、第二早大事件と続き、それらを闘った私たちはその後さまざまな場所に散って行ったのですが、それを全体として今日のようにしたら有効に今後に生かすことができるか——という目的と動機でこのフォーラムは開かれました。われわれの運動には成功も失敗もありました。そのすべてから学ぶことなしには、9月11日以降の状況を押し戻すことはできません。10月29日の自衛隊海外派兵の立法、国会まで行ってききましたが、これは歴史的な日です——自衛隊が戦争協力のために出兵して行くようになったのですから。これを見て、「絶望した」と言っている人がいます。絶望もまたよろしい、絶望しなければ、希望もまた出てきませんから。東大の一九会はそのを日指し、文集を4号まで発行し、先ほどまでこの会場にいた大野（昭之、元文京原水協）さんのものを初め、力作が発表されています。この会は高沢・安仁（安東）グループです。武井（昭夫）グループは加わっていません。早稲田は方々と付き合ひがあり、武井グループに親しい柴田（昭三、1949-50年当時都立書庫書記長）君のような人もいます。

東大がこれを始めたので、早稲田は張り合うわけではなかったのですが、『早稲田・1950年・史料と証言』を制作・刊行することとなり、全6号を出して2001年に完結しました。一体われわれは何だったのか——これを解かねばならないのですが、両誌ともに青春の息吹がありませんが、しかしいまだに解けない問題がある。（傍らの犬丸氏に）犬丸君だって色々と言っているけど、やっていない。北京学校などばぜんぜん解いていない。あなたは北京には行ったのですか、どうなのですか。明日行われる京都のフォーラムも、是非これを聞いて、答えを打ち出してもらいたいと思います。中央大も総括を日指しているとお聞きしております。早稲田は全6冊をCDにしました。当時歌われていた歌のCDも制作しました。それでは、これをもって閉会とします。（拍手）

第Ⅰ期全学連高揚の瞬間

—京大生の天皇への公開質問状—

高橋 彦博 (法政大学名誉教授)

(1) 状況から状況へ

後楽園の東京ドームを見下ろす文京シビック・センター5階の会議室における数時間は、50年前の全学連=学生自治会の一員として、学生運動、ただそのことだけに夢中で毎日を過ごしていたあの青春の日々に戻った思いのするひとときであった。

「早稲田50年の会」が中心になった「各大学実行委員会」によって「京大天皇事件50周年」の集会が開かれたのは2001年11月11日であった。東京の第Ⅰ期全学連関係者が京大の同学会関係者を招くこのことで、私など、一もなく二もなく駆け付けたのであった。会議室に補助椅子が出るほどの盛会であった。京都の人たちの多くは、50年ぶりの再会とこのことであった。そして、この出来事について関係者が語り合っているのは初めてということであった。それにもかかわらず、京都の皆さんが、ことのあらましをまるで昨日のできごとであったかのようにユーマアたっぷり語るのには驚きであった。

「早稲田50年の会」の長瀬隆さんがテープをおこして作成した「記録」を見て、そうであったなどと、まず気付かされたことがあった。それは、50年前の京大への天皇巡幸を学生たちが平和の歌声で迎えた出来事についての回顧と、50年後の今日、自衛隊の海外派遣が国会で承認された事態に対して発せられる抗議とが、フォーラムの会場で混然と一体のものとなっていたことである。

アメリカのブッシュ政権による「新しい戦争」が全面的に展開されるにいたった状況でもたれたこのフォーラムは、最初から、50年前の学生運動を回顧する会にとどまらない雰囲気につつまれていた。今日

を守れ」の歌声で「応えた」のであった。

分刻みに組まれていたであろう天皇の京大行幸の日程は、500人ほどの学生の「平和を守れ」の歌声につつまれ、14分、くるわけられた。天皇が、行幸先で大衆の示威行動に遭遇し、会議室に一定時間、閉じこめられたのである。世が世であれば間違いなく不敬罪の対象となる事件であった。しかし、学生たちのその日の動きは、青木氏が言うように、まさに「自然発生的」であった。しかも、学生たちの動きは、ほかにも理由があったであろうが、市条例の適用が困難とされるほど充分に自制的であったのである。

(3) 天皇への質問状

同学会が「天皇裕仁殿」と明記した「公開質問状」を用意したのは事実であるが、『大年表』が記述するように、出来事発生の当日、11日に、それを天皇に手渡ししようとした事実はなかった。後日、同学会が公にした「公開質問状」のコピーがある。これも、フォーラムの席上で配付された資料の一点であるが、それを見ると、同学会は「11日同学会が学長を通じ天皇にお渡ししようとしたところ、学長が拒否されたもの」との説明を付している。同学会は「公開質問状」を直接、天皇に渡せるとは思っていないかったし、渡そうとしたことはなかった。「学生の天皇に対する気持、平和を願う気持ちを訴える用意をしただけ」であった(青木宏発言)。

同学会が用意し、はじめから天皇に届けるより社会に公開する目的で作成されたと思われる「公開質問状」は、これも『大事典』が記述するように、天皇に、単独講和や再軍備について賛成か反対かと返答を迫る単純な内容の設問にはなっていないかった。

「公開質問状」は、第一に、日本が戦争に巻き込まれるような事態が起きるならば「貴方は個人としてでもそれを拒否するように世界に訴えられる用意があるでしようか」と問うものであった。第二に、日本が再軍備を強要されるような事態が起きるならば「貴方は…これを

拒否する様呼びかけられる用意があるでしようか」と問うものであった。

「公開質問状」の論理は、天皇に対し、「終戦の証書」と「憲法」を根拠に、日本国憲法体制の遵守を求めるものであり、いわゆる「天皇制反対」の立場からする天皇批判ではなかった。「公開質問状」の執筆者は、同学会研究総務であり京大新聞会に属する中岡哲郎氏であったことが、フォーラムの席上、小畑哲雄氏の発言によって明らかにされている。

「公開質問状」に示された「学生の天皇に対する気持」とは、「天皇制反対」を叫ぶものではなく、「個人」としての「貴方」に要望するものであり、「個人」としての「貴方」に期待させるものであった。「公開質問状」は、結びの節で、「私達はいまだに日本において貴方のもつている影響力が大であることを認めます」と述べている。「貴方が…意見をもつた個人として、努力されることに希望をつなぐものです」とも述べている。

(4) 象徴天皇に期待する立場

フォーラムの席上、「京大行幸事件」について、東京側の参加者の一人から、「公開質問状」は天皇批判を「もっと堂々と」行うべきであったし、とくに天皇の戦争責任を指摘すべきであったとする意見が述べられた。そう述べたのは池山重郎氏である。

京大の方々の「意向してではなく、結果として起こった」「歓迎もしないが反対もしない」という報告にはいささか意外の感じをうけました。力関係ということもあったと思いますが、天皇の戦争責任を追及する、もっと堂々と「戦争の責任がまだすんでいない」と指摘する運動になってもよかったのではないかと。1951年大学1年のときこの事件の報に接し、京大を理想化してよくやっただと思ったが、今日の報告を聞くと、もっとやっても良かったと思う。

しかし、同学会の「公開質問状」は、天皇の戦争責任を不問に付すものではなく、池山氏とは違う論理で戦争責任を追及しているのではあ

った。同学会は「私達は貴方が退位され、天皇制が廃止される事をのぞむのですが…」と、その基本的立場を明らかにしている。その上で、「我々はもろろんかつての貴方の責任を許しはしないけれどもそれよりも、なお一層貴方が同じあやまちを繰り返さないことをのぞみます」とするのであった。

この同学会の判断は、池山氏の言う「力関係」の計算からもたらされたものではなかった。天皇制について、とくに大皇家については、「天皇さん」などという言葉に示されるように、京都は東京などとはことなる受け止め方をしている土地柄である。同学会の「公開質問状」は、その京都の雰囲気の中で、あえて提示されたものであった。

天皇行幸を“平和の歌”で迎えた京大の学生たちの中に京都出身の京大生は少なかったという事情があった。その点については、フォーラムの席上、かつての「京童」による次のような発言があった。

そういう次第で私は（京童の一人として）天皇を見ていたので、あの日、天皇を迎えた2500人の中には加わりませんでした。…京大の学生は1万数千人でしたから、迎えなかった者が多数を占めていたのです。京童はほとんど行かなかったと思いますよ。

こう発言したのは酒井大蔵氏であったが、戦時中、軍の学校にいた酒井氏は、「京童」としての天皇への感情と違ったもう一つ別の感情にもとらわれていたと発言している。

私に180度の転換が生じました。私としてはもう一日一時間といえども、これ以上あの人のために費やしたくはなかった。（京大に）在学中、私が欠席したのはあの一日だけなのでして、先ほど工学部の方で実験していた人（被処分学生）の話が出ましたが、私は家におりました。もうそのころには大石義雄さんの憲法、東京大学の注解日本国憲法全5巻を読み上げておりました。

同学会の天皇制批判意識が直面していたのは絶対主義天皇制の残滓ではなかった。伝統主義的な天皇主義を継承し再生した戦後民主主義としての象徴天皇制であった。同学会が「公開質問状」で、単独講和

や再軍備について詰問し戦争責任について糾弾しなかったのは、絶対主義的な天皇制との対決に新憲法体制下の社会的政治的争点があるのではないとする状況認識を持っていたからであった。同学会が、そして中岡哲朗氏が、直視し対峙したのは、日本国憲法体制に同化した、和辻哲郎氏が言うような「文化的天皇制」であったのである。

(5) 第Ⅰ期全学連としての共通性

前年(1950年)の秋、「レッド・パージ反対闘争」でレッド・パージされ、早稲田の全学自治会が解散された状況で、政経学部の下室の第二社研の部室に屯していた私は、そして友人たちは、1951年の秋の「京大行幸事件」の報に接して、その出来事の学生運動としての意義について考えたこともなければ、とくに議論したこともなかった。今回のフォーラムで、50年後の今日、ようやく、あらためてその意義を見出したのであった。

第Ⅰ期全学連の高揚期における1950年の「レッド・パージ反対闘争」と1951年の「京大行幸事件」を比較すると次のように言えるであろう。

①「レッド・パージ反対闘争」も「京大行幸事件」も、学生大衆運動としての共通性を持っていた。しかも、その大衆運動の内容は、平和運動としての特徴を示すものとなっていた。

②東大や早稲田において、京大において、第Ⅰ期全学連の活動は、占領軍総司令部や天皇制という最高権力へ、公然と面会を求め、公開質問状をぶつけるなどの合法的権力批判の行動となっていた。その際、それらの活動は、戦後民主主義が獲得した市民権を充分に活用するものとなっていた。

③第一次・第二次早大事件も、東大ボロボロ事件も、そして「京大行幸事件」も、警察権力の学内潜入と侵入に激しく抗議するものとなり、大学における学問の自由を新憲法の原則として定着させる大衆行動となっていた。

④ただし、第Ⅰ期全学連において、大衆的學生運動はアメリカ帝国

主義の支配と日本軍国主義の復活に反対する「反帝・反植民地闘争」として評価されていたのであり、新憲法定着過程の担い手となる大衆運動として評価され自覚されることはなかった。この点は、負の共通点となっている。

⑤東京と京都の第Ⅰ期全学連の運動における大きな違いとなっているのは、新憲法体制としての天皇制への対応であった。京都の同学会が示したような象徴天皇制の「文化的天皇制」としてのあり方に注目した機能主義的批判を展開する視点は、東京の各大学自治会には見受けられなかった。今回のフォーラムで紹介された一高寮祭の展示(1948年)や『中大新聞』のイラスト(1949年)など、天皇制を揶揄し風刺するものではあったも象徴天皇制を共和制に融和させ溶解する戦略思想からはほど遠いものであった。早稲田の場合には、津田左右吉教授によってなされた象徴天皇制を「応用」せよとする助言を一蹴するという実績をもっていた(1946年) (*)。

(*) この早稲田の例については『早稲田1950年史料と証言(別冊資料篇)』(2000年6月)を参照されたい。

(6) 社会運動としての学生運動

フォーラムにおける発言の中に、東大「・・・九会」の犬丸義一氏の「高橋の論文」が云々とあり、それを受けた私の「犬丸さんとの電話とのやりとり」云々とあるのは、実はこういうことであった。

「早稲田50年の会」が、1950年のレッド・パージ反対闘争の記録を50周年記念に6冊本として刊行した。私は、その紹介を、勤務先の大学の紀要に「研究ノート」として発表した。「早稲田50年の会」の有志による私の「研究ノート」についての合評会がもたれた。私は、合評会の記録をワーキング・ペーパーとして有志に配布した。そのペーパーで、私は、東大「・・・九会」における1950年の学生運動総括に共産党の上田耕一郎氏と不破哲三氏が参加していないのはおかしいと発

言した（*）。私の上田・不破両氏批判には、故・石堂清倫氏の指摘に依拠した『戦後革命論争史』絶版の経緯に関する疑義が含まれていた。私の疑義提起について、労働運動史研究の先輩にあたる犬丸氏から「君の批判はさすがだ」とお叱りをちょうだいした。そういう経過があったのである。

（*）研究ノート『新憲法定着過程における大衆的學生運動——『早稲田1950年史料と証言』（全6冊）刊行の意義——』は法政大学社会学部紀要『社会志林』第47巻第4号、2001年3月。ワーキング・ペーパー・《合評会記録》（『早稲田1950年史料と証言』の《研究ノート》をめぐって——「東大ポロ事件」と第二次早大事件」その他——）は有志に配布。同ペーパー中、上田・不破両氏批判の部分は宮地健一氏のホームページに掲載されている。

私は、犬丸氏との議論を、学生運動を大衆的社会運動としてとらえる視点でさらに展開したいと思っている。学生運動は、戦前からの伝統を継承する社会運動であった。大きく言えば、社会運動としての学生運動は明治社会運動の後継者としての位置を占めている。1950年の学生運動は、労働組合期成会100年、社会民主党100年、日本共産党80年を振り返る視点で分析され検証されるべきではなかろうか。フォーラム席上で発言の機会を得たとき、私は、そう述べたつもりでいる。

日本の社会運動の歴史において、1950年前後の第Ⅰ期全学連の運動は、まれに見る純粋な大衆運動になっていったというのが私の論点である。日本共産党が天皇制について評価を変えるのは結構であるが、それについては50年前、「京大行幸事件」という大衆運動に学ぶことのできなかった同党の体質が反省されなければならない。

わが「戦争と天皇制」

長瀬隆

一九八八年は苦難の年であった。私は貿易商社のソ連担当部門で働きながら、ペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』（89年みすず書房刊）の翻訳に従事していた。ところがわが配偶者に異変が生じたのである。当時すでに彼女は二度にわたる乳がんで両乳房を失い、さらに左腎臓にがんが発見されて摘出手術をうけ、人に透析の生活に入ってから四年目になっていた。ところが透析後の血圧の降下がはなはだしく、それまではひとりで電車を利用して通院していたのに、送り迎えが必要となったのである。私は持ち家を手放し、クリニックに徒歩で行ける距離の所にマンションを求め、また会社をも辞めた。私は翻訳に精を出しつつ、彼女を介護する生活に入った。状態はきわめて悪く、私は彼女の近い死を予想していた。昭和天皇が余命幾ばくもないと報じられたのは、その年の秋の終わり頃であった。

私は夜半小田に立つと、テレビのスイッチを入れるのが常となった。NHKは死没の場合には速報を流すべく、終夜その体制をとっていて、待機の日々は長く続いた。私は二重橋のうつるその画面の奥に、樺太は大泊の中学校の校庭にあった奉安殿を見ていた。若い世代の人には分らないと思うのだが、それは昭和の天皇と皇后に関連した何かを収めた小さな、しかし堅牢な建造物であって、私たち生徒はその前を通過するとき、立ち止まって直立不動の姿勢で対し、挙手の礼をしていたのである。その傍らには白樺の木が伸びていたが、それはその人が摂政の宮であった大正一四年に来樺し、来校されたさいにお手植えになったものである。学校そのものは明治四五年に樺太中学校の名で開校した、その地でもっとも古い歴史をもつ中学校であった。

町外れのゆるやかな丘の斜面に立つその学校は、一九四五年八月下旬、ソ連軍の兵舎になり、私はもはや近づくことも見ることもなくなつた。一年半後、私はその町を離れ、西の、間宮海峡に面した真岡から引揚げた。樺太の地はその後、一九六〇年代にはいって少数の墓参者が行けるようになっていたが、その場所は、二の都市に限られていて、南の、大泊を中心とする亞庭湾の沿岸地方は、まだだれも入れずにいた。したがって私がその奉安殿を想うということは、そこに在校していた日々を思うことであり、いっただいあは今は今どうなっているのだろうと思いを巡らすことだったのである。

その地域をも含め、南サハリンの全域が開放されたのは翌一九八九年のことであった。人々は団あるいはグループを結成して再訪したのだったが、その一人に、初期の在校者である俳人の山口誓子氏がいた。校舎は、かつてはロシア軍の兵舎であった場所の近くに建設されていた、ロシア軍の煉瓦作りの兵舎は、初期には寄宿舎として使われていたようである。新聞に掲載された随筆によると、山口氏は草むらをかき分けつつそこを目指して歩き、煉瓦が点在する地点に達し、そこがかつての寄宿舎跡であることを確認したのである。

氏が探索に難渋したのは、目印となるべき日本時代の木造の校舎が朽ち果てて跡形もなかったからだだった。しかしそこがまさに校舎跡であることが確認されたのは何によってだったろう。鉄筋コンクリートで建造されていたために残っていた奉安殿によってだったのである。東京での同窓会で再訪者の報告を聞いて後、私はその一人に尋ねたものであった、「何かに使われていましたか」と。「鶏小屋になっていたよ」という返事であった。

南北に細く長く連なる樺太サハリンの地図上の形を、チェーホフはちやうどめに例えており、それに従えば、南の亞庭湾地方は尾鰭ということになる。その両尾鰭の東のほうは中知床半島と呼ばれ、その中ほどに日本時代には遠淵（とうぶち）と呼ばれた村があった。私は大

泊の生まれなのであるが、物心つき育ったのは、大きな湖のほとりに位置したその村であった。大泊を経由してでなければいけないところで、そこも同じ年に初めてひとりがいり、翌年、人々は団をつつて再訪した。私が学んだ小学校は同様に朽ち果てて跡形もなかったが、また同様に奉安殿だけは残っていた。

やがて樺太人たちは堰を切ったように、それぞれの思い出の地を再訪し、記念碑や慰霊碑を建立するようになった。その模様をサハリンの新聞が報道し、求められてその記事を翻訳し、その人々の話を聞く機会が重なった。それから明かになったことは、サハリンの全域にわたって相当数の奉安殿が残っているということだった！ 多数の碑が建立されたために、それらをまとめた保守の必要の声があがっているほどである。それらを訪ねるツアーを企画したとす。するとそれは近くにたいてい奉安殿があることによって、日本全国におけると同様に、かつてその地に存在した天皇信仰を捜し訪ねるツアーともなるのである！ 私は上井晩翠の作詞になる大泊中学校の校歌を思い出さなうでおれなかった。樺太とは「アジアの東の端なる日本」の「伸びゆく命の力のひとつ」であり、「北斗の下なる新たな領土」であって、「皇上の御」なのである。若い人たちに告げねばならない、「皇上」という言葉が存在したということ。「皇国の興廢この一戦にあり、各員奮励努力せよ」の三笠艦上の信号から始まった海戦の勝利の結果、再獲得した領土が「皇上」であったのはけだし当然であった。

昭和天皇が死をむかえようとしていた日々、私が敗戦時に在校していた樺太の中学校を思い出すこと多かったのは、自然だったとしないければならない。私が入学したのは昭和十九年であるが、音楽の教科書の冒頭に掲げられていたのは「日本海海戦」であって、音楽室に近い学級であったために、連日それを聞く日々があった。しかしその学校は敗戦により消滅し、やがて私は引揚者となった。

そして平成と年号が変わって十四年、私はまたしてもわが失われた

故郷の樺太の天皇を思い出すことになったのであるが、それは外でもない、『京大天皇事件五十周年東京フォーラム』のテープを起こす羽目になったためである。私たちはその開催のためにそれなりに努力したが、実のところ四十人集まるかどうか危ぶんでいたのだから大成功が七十人集まり、諸発言もまた充実したものだのだから大成功であった。しかし用意していた録音器は並のものであり、発言者のマイクに直接接続してはいなかった。それを起こして記録を公表しようとは思ってはいなかったのである。私たちは年に2回の薄い通信を発行していて、それにその要旨を掲載しようと思っていたに過ぎなかった。その予定者の体調不良により、急遽私が行うことになり、およそ三十枚の要約を作成した。ところが、これが私たちのあいだで好評で、小冊子を制作しようということになり、フォーマルの記録は六十枚以上に拡大してよいこととなった。そしてこのため災難的な苦役が継続することになった。

私は、テープ起こしは初めてであったが、近年感じていた聴力の減退をこれによってすでに痛感していた。とはいえフォーマルには出席していたわけであり、完全な復元ではなかったもので、明瞭に聞き取れる言葉を繋いでいって要約をつくることはできた。つまり低い声や声は飛ばしてゆくことができたのである。私はこの段階でも若い人に頼もうかと思ったが、内容の理解力という点で任せることができず、私単独で行ったのである。今や繰り返してテープを聞き、少なからぬ箇所を類推・憶測して復元することになって、私は、或る箇所を完全に誤解した。敗戦の天皇放送の聴取体験が、発言者との間で非常に違っていたためなのである。

S氏は京都生まれの京都市育ちであることを述べ、紀元二六〇〇年(S15)の天皇の京都行幸を迎えた体験から話し始めた。小学生たちは烏丸三条に整列し、天皇を黙迎、黙送しており、このときその顔を見ているのである。その五年後の八月十五日、氏は「軍の学校」の生

徒として天皇の放送を聞き（「それが雑音で聞きとれなかったために」と説明されれば、誤解はしなかった）、校長は「聖戦の完遂」を説き、日本語の辞書には「降伏」という言葉は無い、と述べる。「ところがそれから二時間後に降伏を知りました」と続くのである。私は『樺太よ遠く孤独な』（西田書店一九八四年刊）という作品のなかでは書いているのだけれど、雑音のために聞き取りにくかったが、放送なかばで日本は敗れたのであり、降伏することを知った。二時間もたってから知ったとは奇怪であり、誤聴ではないかと疑い、辻褄合わせを行った。実際はこうであった。校長は聞き取れぬまに（?）、生徒にたいして放送が「聖戦の貫徹」を説いたものと訓示し、日本が降伏することなどありえない、と信じていたS氏はその訓示を信じたのである。日本が負けることはあるとは考えていたこのことであった。しかしそのときはすべての日本人が玉砕して果てるのであり、天皇もまた同様なのである。降伏だけは絶対にしない、と氏は信じていた。ところが、その人が降伏したのである。「私に一八〇度の転換が生じました」。これは「などで人となりたまいし」と訴えた三島由紀夫の亡霊よりも壮絶であると言われなければならない。なぜなら氏は「なぞで降伏なされましき」と問うたのだからである。私流に演繹するならば、天皇は「すべての臣民よ、朕も死ぬから、汝らも残らず死んで聖戦を貫徹せよ」と言うべきだったのである。

私は地獄的な苦しみを経て復元したものの誤りを指摘されて面白くなかった。それで私が放送なかばで降伏を知ったことを話すと、「どんなラジオだったのですか」と問われ、並のものだったと伝えるとき、「あなたはカimei的な人です」と評された。カimeiはどうやら開明らしいので、「私が開明的なのですか」と問うと、「そうです」ということであり、さらに「外地だったの、開明的だったのしょう」と言われた。氏は敗戦以来、天皇の顔は二度とは見なくなかったはずなのであって、だから五一年の京大来校にさいしては家に引きこもっ

て、憲法書を読んで過ごしたのであり、天皇を迎えたのは「地方出身の秀才の方々だったのではないでしようか」と述べて、会場を爆笑させたのである。私は地方どころか辺境に住んでいた日本人で氏のような人からは憫笑されてしかるべき存在だった。それが、開明的だと言われたのだから、恐れ入った。しかし私の「開明性」はまことに外地育ちと関係があるかもしれないなかった。もともと、樺太は昭和十七年に、その管轄が内務省に移管されていて、外地ではなかったということも言っておく必要がある。「沖縄は日本で唯一地上戦が行われたところ」という言葉を聞くたびに、樺太人は北の戦闘が忘れられていることに寂しさと痛みを感じてきたのである。

ソ連崩壊後のサハリン史学界の変貌はめざましく、日露戦争後、日本国籍を取得して残留した少数のロシア人（とその子孫）についての報告も発表されている。その多くは対日協力、反ソ活動のゆえに重刑に処せられて収容所送りになり、論文はそれが誤りであったことを指摘するものである。その最初に挙げられている人物に、遠淵に近い荒栗というところのロシア集落出身のエフイモフがいる。妻女は日本人で八人の子をなした。遠淵のわが家にはその次女がお手伝いとして通ってきていて、私はその弟であるキヨミと交わって育った。私の作品は、この姉弟との交わりを軸とした物語なのであるが、私が大學は露文科に進んだのも、彼らに起因していた。引揚げて三年たった年に、母親と四人の息子・娘が日本に引揚げていることを知ったのが直接の原因だったのである。

私はまだソ連占領下で暮らしていた頃から、いつの日にか樺太で生じたことは書かなければならないと思っていた。つまり私は作家志望であった。しかし一九五二年に入学して入会したソヴィエト研究会は、分裂している日共によって所感派に属し、かつYの名称で呼ばれていた軍事組織——といってもささやかなものだったが——のメンバーを抱えていた。ソ連は理想国と見なされ、スターリンは神格化されていた。

私はその会で樺太で見かつ体験してきたソ連について語って袋叩きに合っている。以来樺太について語るのは危険であると考えることになった。私はロシア語の習得を含め、ソ連とは何かを研究する方向に転じた。そして私はしばらく樺太を忘却にゆだねたほうがよいと判断し、そのためには共産党にはいったほうがよいと思うと入党した。五三年の十一月のことであった。一年後、総点検運動——六全協にたいする逆流であった——があり、組織を離れた。

『早稲田・一九五〇年・史料と証言』は多くのことを明かにした。しかしほんの少し匂っただけで、解明には至らなかった問題にY組織とこの総点検運動の問題がある。私を知るかぎりでも複数の自殺者が出ており、またこれがかららんの後年の自殺的事故死があった。あの暗い事件については闇に付されたままだ。私が連載した『松尾隆』に関連して言えば、教授が国際派「分派」と見なされていて、学内で講演ができなかった時期の出来事である。

教授は五六年に亡くなり、翌五七年に私は原水協から起用されてその使節団に従って初めてモスクワの上を踏んだ。クレムリンの会談でブルガーリンは「第二次世界大戦で最大の二千万の犠牲を払ったソ連国民にはヒロシマ・ナガサキの体験はよく理解できます」と述べ、これは全部の新聞に報じられて、私たちは行く先々でこの言葉を繰り返して聞くことになった。私は根拠も証拠もなしにフルシチョフによってこの時期に出されたこの数字を怪しいと思っている。これは強制収容所の犠牲者の数字も全部含めたものではなかろうか。もしもかりにそうだったとしても、そんなに手ひどく傷つきながら、対日戦への参加という新しい戦争に乗り出したのは何故か。スターリン個人による領土獲得の野心のためであった。参戦はヒロシマへの原爆投下によって急遽繰り上げられ、樺太での攻撃は八月一五日以降に激化した。「氷雪の門」の若い女性たちの服毒自害は二〇日、三隻の緊急疎開船の撃沈は二二日の出来事であった。ちなみに私はその一隻に、超満員のた

め乗船を断わられて今日まで生きている。

樺太について語り書くことは、それらの哀しみとソ連の理不尽について語り書くことであった。しかし誤って左翼に身を投じたために、それを遮られることになって、私は樺太を二つのことにおいてのみ記憶しつづけることになった。ひとつは十月末になって不完全な形で再開された中学校で受けた原爆についての授業であり、いまひとつは別れに望んだ遠淵湖の青い水の広がりと背後の山々の永遠に変わることのない佇まいであった。ミンスクでまたもや「よく理解できず」を聞くことになって、わが団の長崎の被爆者は耐えられなくなつて反論・批判したのだったが、それから三十四年をへた一九九一年に、私は同じその都市を広島大原医研の教授らと訪ね、チェルノブイリの被爆者たちと会った。クレムリンはヒロシマ・ナガサキから何一つ学んではいなかった。それはセミパラチンスクの膨大な放射能被害を見ればより一層明白となる。

引揚者であるということは、故郷喪失者であるということである。かつて住んだ場所には帰れぬ以上、新しくどこかに結びつかねばならない。私はその結びつきにおいて樺太を書こうという戦略をもつことになる。最初のモスクワ行から二年たった一九五九年、私はウイーンで行われた平和友好祭に行き、その団で被団協代表だったKと帰国後結婚する。広島の一・三キロ地点の被爆者であり、私は奇形児や虚弱児の父親になる恐怖を感じなかったわけではなかった。しかしわが配偶者のほう是被爆によって妊娠の能力が失われたのではなかろうかと案じていて、妊娠が明らかになると「わたしに能力があったのね」と天を仰いでいた。生まれた子は男子だったが、心臓にファロー四徴症という重症の病変変があつて、四歳十か月で逝った。南太平洋の水爆実験地域の原住民、米本土の核実験従事者のあいだに同様の病変変の子供たちが生まれており、原爆が原因であろうと思われる。

それから数年して私はその子の不幸な生と死を日標に、彼女との出

会いから結婚にいたる過程を書こうと試みることになった。しかしそれがうまく行かぬうちに、引揚げて以来たえて会うことのなかった、遠淵村の小学校の同窓生との再会が重なることになり、互いに語り合つていて、私は混血のキヨミに浴びせられていたはやし言葉の記憶を回復する。ロシア語の卑猥な原意の罅隙をあらかわす言葉、ヨッポイマ一チの崩れた発音形態であるヨッポイマツという言葉であつて、私はまだ村にあつた早い時期にそれを忘れていた。敗戦後ソ連軍が入つてきて、ヨッポイマ一チを覚え、それがバカヤローを意味すると正しく理解したのだったが、幼かった頃、遠淵で聞いていたヨッポイマツは忘却にゆだねられていて、その発音の類似に気づかなかつた。そして私は敗戦から一年たった夏、村に別れを告げるために訪ねており、キヨミに会っているのであるが、混血者をめぐつての乱闘の記憶のゆえに訪ねていたにもかかわらず、その言葉を思い出していないのである。

その記憶の回復によつて、私は引揚げ初めてその姉の女性を訪ねることになった。兄弟姉妹は四人と四人に別れて生きていた。またこれ为契机に、大泊の中学校の同窓会にも出席することとなる。つまり七十年代にはいって、私に大幅な樺太の戦りがあったのであるが、しかしそれは結婚後貿易商社に勤務し、ソ連担当者として暮らしてきた私が、ますますその国に深入りすることになった時期と重なっていた。そして私はその結果として、ソ連経済が冷戦の継続に耐ええないこと、ソ連は崩壊に向かつていっていると考えるようになった。一九四五年夏樺太に生じたことは、この結論なしには書けない主題だった。私は八三〜八四年によくそれに到達し、『樺太よ——』を書いたのである。

わが配偶者が乳がんで両乳房を失ひ、片方の腎臓ががんで摘出されて、人工透析の生活にはいったのは、同様にその年のことであつた。家事まで私がすることになって、災難といえまばことに災難だったのであるが、書くことにとつては悪いことではなかつた。一九八六年、『ヒロシマまでの長い道』(晩聲社)が書きあがつた。

ロシアにおける社会主義を目指す革命が、避けがたく一部の者による専制、つまり全体主義に陥るという予言をした作家がいた。ドストエフスキーであり、その『悪霊』である。そのことをマルクス主義の立場から評価したのがペレヴェヅェフであり、そのために彼は「ソ連文学の敵」と断罪され、収容所に送られた。その論文をふくむ『ドストエフスキーの創造』の翻訳がこれに続いた。そしてそれは冒頭で述べた、生活の崩壊状況においてだった。

新薬が投与されるようになり、往路はひとりで行けるようになり、私は一九九一年にペルリン、バルト三国、チェルノブイリと旅をした。それから、その子がまだ存命だった時、私がこころ秘かに「雄太のヒロシマの子」と呼んでいた長男を中心にすえて、『微笑の沈黙』（同、一九九六）を書いた。

崩壊後、厳秘に付れてきた公文書の公開が進んだためであるが、ソ連が全体主義国家であったこと、従って、行った戦争もまたその相手国同様に帝国主義戦争であったこと、日ソ中立条約はソ連によって侵犯されたこと、日本将兵の強制抑留の国際法違反が明らかにされるに至った。雄太サハリン史についても同様で、「サハリンを発見したのは、疑いもなく、日本人であり、日本人が最初に南サハリンを領有したのである」とするチェーホフの『サハリン島』での見解は、実として承認される一歩手前まで来ている。

わが配偶者は、広島にはたまたま滞在していて被爆したものであり、芸備線の戸坂に徒歩で逃れ、翌日から起立不能となって、その年の二月までその収容所に留まった。軍閥係者とその家族に割り当てられた所だったらしいのだが、精神に変調をきたした人がいて、しばしば「天皇陛下万歳」を三唱していたという。最初は悩ましげに見つめていた人々も、やがては声をたてて笑ったと語っている。

今あらためて問う 戦争と天皇制

発行日	2002年2月20日
編集人	長瀬 隆
発行人	吉田嘉清
発行	早稲田・1950年・記録の会 〒216-0003 川崎市宮前区有馬1-10-24-201 長瀬気付 電話&FAX 044-855-3768 Eメール tarbou.nagase@nifty.ne.jp 株式会社 平文社
印刷	株式会社 平文社

非売品